

スギゴケ 庭園材

植付けと管理のポイント

基礎

《スギゴケは土の中から芽を育てる・徒長をおさえて過保護にしない》

スギゴケは仮根を土の中に残します。スギゴケを刈り取っても、土の中で仮根が生きていれば、写真のように無数の新芽が育ち始めます。元気な群落も、もし新芽が育っていないければ、やがてその群落は衰退していきます。ポイントは新芽を育てる。

ここが植えつけのポイント

明るい土の上で育つ



日本にはおよそ1700種の苔植物が自生していますが、その性質は多様です。育つ環境が違えば、林の中、日向、岩上や倒木など育つ場所も苔によってだいたい決まっています。写真は弊社スギゴケの圃場です。野菜を育てていた畑で培地は畑土で、遮光ネットも水やりもせず育てています。普通の苔には厳しい環境ですが、このような環境でもスギゴケは育ちます。日陰の湿潤地という苔のイメージでスギゴケは育てられません。

新芽を育てる



スギゴケは茎から枝分かれせず、先端が長く伸びていくだけで、成長してもスギゴケの茎から芽数は殖えません。土の中から新芽が育っていない群落は確実に衰退します。コロニーを広げ維持していくには、表土からの新しい芽を殖やしていくようにします。土は固くならないよう土壌改良を行い、スギゴケマットの土と表土に完全に密着固定させます。写真は刈込んだところから、無数の新芽が育ち始めたものです

徒長させない



直立するスギゴケは成長にともない大きく徒長します。普通は10cmほどに伸びると直立できずに倒れてしまいますが、画像のように30cm、40cmと厚いマットに育つこともあり、これはグランドカバーとしては好ましくありません。またスギゴケが倒れると、根元に日光が届かなくなり、蒸れをおこして新芽が全く育たなくなります。できるだけ徒長をおさえ、必要ならば苔の間引きや刈り取りをおこないます。

過保護に育てない



日陰地で水をやりすぎると軟弱に育ち、環境の変化に適應できなくなります。落葉ひろいや草取りでの適度な踏みつけは苔を丈夫にします。水のやり過ぎに注意し、適度な乾燥も必要です。

混植もお勧め



ほふく性のハイゴケと直立するスギゴケやスナゴケとの混植は相性が良く、どちらの苔も良く育ちます。ハイゴケ、スナゴケ、スギゴケはいずれも日向でも育つ丈夫な苔です。

日当たり地でも育つ 朝露で育つ

スギゴケは庇（ひさし）や木の下を嫌い、日当たりの良い場所や、水はけの良い築山等で良く育ちます。早朝に朝露があたり、朝の柔らかい日射しとその水分でスギゴケは生長し、日中の日照と乾燥は葉を閉じて休んでいます。このメリハリがスギゴケの生長には必要です。

